

数字がわかれば 経営はうまくいく なんて大間違い



岡本 裕介
OKAMOTO Yusuke

食の劇場
(香川県高松市)

私が初めて農業に触れたのは、2004年、日本公庫農林水産事業の前身である農林漁業金融公庫に入社してからのことです。融資相談で農場へ出掛け、熟れた麦を見て米と勘違いしたりシソと大葉が同じだと初めて知ったり。恥を多くかきながらも、多くの農業経営者と出会い刺激を受け、私は農業の現場で農業経営を学びました。

「事業をしていれば良いときも悪いときもある。うまくいっている感覚を肌で掴むことが大切」

これはハーブ類や珍しい西洋野菜の生産で成功した経営者の言葉です。数字に一喜一憂せずいかに仕事を楽しまか、そんなことをよく話してくれました。

多くの経営者が、数字を使いこなして合理的に判断し1円でも多く

利益を残したい、簿記や会計を学びたいと考えています。そんな相談を受ける度に「感覚で判断して利益を残せるうちは、無理に数字で捉えていく必要はないですよ」と答えています。物事が順調に運んで

判断できる経営者の肌感覚です。コロナ禍で先が読めず、過去の数字に頼ることができない今こそ、追い風が吹けば思い切って動き、危機感を覚えれば迅速に対策を講じる、そんな洞察力が経営者には求



©宮本 孝廣

いるかどうかチェックするバロメーターを一つか二つ持っていれば、まずはいいのではないのでしょうか。

経営は、実績や数字で捉える定量的な要素と、経験や肌感覚ともいえる定性的な要素で成り立っています。経営者をサポートしていて、多額の投資や経営改善を進めるときにはどうしても数字で捉えていく必要がありますが、数字だけで判断すると間違いのもとです。

やはり最後に頼りになるのは、時代の潮流や業界動向を感じ取って

められます。

数字が机上の空論で終わらないように現場へ行って自分の目と耳で確かめて実践することが、経営者にもサポートする立場の私たちにも大切です。

「数字ばかりチェックしなくても、畑に出て農作物の生育を確認し、スタッフや取引先とちゃんと会話ができていれば十分だよ、岡本君」

若い頃の私に、農業経営の勘所を教えてくれた経営者の言葉は、今も大切な教えとして生きています。**F**

おかもと ゆうすけ

1981年岡山県生まれ。公庫、地方銀行と14年の金融機関勤務を経て、経営相談や食品・青果の販売をおこなう「食の劇場」を創業。趣味は農村めぐり。



農業経営アドバイザーは農業経営者のニーズに対応し、経営への総合的・的確なアドバイスを実践する専門家です。2005年、農業経営の発展に寄与することを目的に日本公庫が資格制度を創設しました。本コーナーは、上級資格である上級農業経営アドバイザーが執筆しています。